



坂口安吾の作品群におけるカタカナ表記の変遷とその効果（二〇二三年度修士論文要旨）

森岡，佑奏

(Citation)

國文論叢別冊, 2:25-26

(Issue Date)

2024-09-30

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100491577>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100491577>



坂口安吾の作品群における

カタカナ表記の変遷とその効果

森岡 佑奏

本論文は、坂口安吾の作品群のうち文芸誌『青い馬』『現代文學』『新潮』に掲載された作品からカタカナ表記語を収集・分析し、とりわけ非外来語のカタカナ表記の使用状態の変化と表現効果を考察したものである。現代におけるカタカナは表音性に特化した字種であり、非外来語に使用される場合には、文字列への埋没防止効果、その語の強調効果・意味のズレの明示などの役割があることが多くの先行論で指摘されている。しかし、カタカナ表記がなされる文脈を丁寧に取扱っている論は少なく、作品全体や作者との関係性について詳しく触れた論は見られなかった。語を「強調」とするという説明の意味についても曖昧さが残る。

つづいて非外来語のカタカナ表記が使用される時期に着目すると、戦後昭和期に流行したことが明らかとなっている。文壇においては伊藤整のユーモラスなカタカナ表記をその嚆矢と見るむきがあった。一方、同時代の作家・坂口安吾のカタカナ表記にはほとんど言及がなく、字種選択の面では注目されてこなかった作家であることが分かった。

そこで、本論文では、坂口安吾という個別の作家に絞ってカタカナ表記の使用状態を確認することで、カタカナ表記が持つ性質や文学作品に与える表現効果をより具体的に検証することを目指す

した。また、安吾のカタカナ表記の変遷を確認するために、年代の異なる三種の雑誌からデータを収集した。

調査手法は、まず作品群のカタカナ表記をすべてExcelに入力し、さらに①外来語 ②二種以上の字種が交ぜ書きされている語 ③品詞分類に適さない語 ④品詞分類 という手順でデータを分類した。次に、①を除いた非外来語のカタカナ表記を集計して三雑誌を比較する表を作成し、各作品を横軸にとった折れ線グラフを提示した。

調査の結果、安吾の初期作品には特徴的なカタカナ表記はまだほとんど見られず、中期作品から非外来語のカタカナ表記が微増し、後期にあたる一九五〇年以降から一頁あたりの非外来語のカタカナ表記語数が一〇語を超えるようになることが分かった。中でも大幅な増加を見せたのは名詞・形容動詞群であった。「バカ」「インチキ」「マジメ」など複数の作品に共通して見られる語はカタカナ表記が定着した語であると考えられる。「オデンヤ」は安吾に特徴的なカタカナ表記であろう。また、語のまとまりを強調するためか、動詞の名詞化をカタカナ表記する例も多く見られた。

交ぜ書きの語では、前部要素に動詞、後部要素に名詞という組み合わせの場合に、前部要素の動詞部分のみカタカナ表記される傾向があることが分かった。また、四字熟語の一部をカタカナ表記化し、漢字の生硬さを回避する例も多く見られた。「石プロ」「ローマ風呂」「モライプロ」のように、後部要素が共通していてもカタカナ表記の位置が定まらない例もあった。

動詞群では、原則として語末の「る」のみひらがなで書くこと、受動態など一語内に切れ目がある場合には助動詞「れる」がひら

がなとなること、準体助詞「の」が後続する場合は動詞部分がすべてカタカナ表記をとることが多いようだった。形容詞群は、語幹の形に応じてカタカナ化する範囲に違いがありそうではあったが、一貫性は薄かった。

代名詞にカタカナ表記が用いられる例では、中期の小説作品「波子」に使用される「ワタクシ」や、後期の一人称説話体小説「夜長姫と耳男」における語り手・耳男の「オレ」が特徴的であった。一人称代名詞がカタカナ表記化する場合、その鋭角的なイメージから発話者の自己認識が強く表出される効果や、意味を希薄化させることによって発話者と受け取り手（読み手）を断絶し、断固とした態度を現前させる効果があると考えられる。執筆者はこのようなカタカナ表記の効果を「固有性表示」とした。

特殊拍のカタカナ表記では、促音のカタカナ表記が後期に入って飛躍的に増加することが分かった。一つの語を分断するかたちで促音のみをカタカナ表記化することは、従来指摘された「語句の切れ目を強調する」「埋没防止効果」とは正反対の働きとなっており、語気の鋭さを表現し躍動感を与えている。

最後に、一九五二年に発表された「夜長姫と耳男」のカタカナ表記を考察する。この作品はカタカナ表記語数が突出して多く、二十二頁の中に二二〇語のカタカナ表記が見られた作品である。

この作品では、個性の薄い夜長の長者を除き、ほぼすべての登場人物がその呼称の一部にカタカナ表記が使用されており、特徴付けられている。カタカナ表記によって固有性を付加される構造は耳男の彫った作品にも同様に見られ、初出では漢字表記「化け物」であったものが、耳男の作品として語られるようになる 것과

カタカナ表記「バケモノ」へと変化する。このようにカタカナ表記によって物質や概念を異化することは、読者を作品内部から疎外し、閉塞的でユニークな異世界を現前させる効果を有していると考えられる。その一方で、他者から耳男に対する呼びかけは漢字で「耳男」とすることによって、読者を作品内部の世界へと繋げるフィルター的作用として耳男の眼が機能しているのである。その他、カタカナ表記される名詞・形容動詞には魅惑的な物への形容、些末なものを表す語、夜長姫がもたらす褒賞や行動など、作品世界全体のイメージに関わる語が多かった。これらは、カタカナ表記化によって意味が希薄化されることで、一層イメージを喚起させる余白が読者に与えられているものであろう。

以上の考察をまとめると、安吾のカタカナ表記は、漢字が持つ重厚な印象から逃れて文章全体のイメージを軽量化する効果、語り手（または発話者）の固有性を強く表示して実在感を持たせる効果、口語性を強調して躍動感を演出する効果、作品の題材と関係の深い語をカタカナ表記化することによって作品全体の印象を形成・補強する効果を持つものであった。

坂口安吾とは、自身の著作の中で伝統的な美文作法を批判し、作者自身の「観念」を作品に表すことを求めている作家であった。執筆者は、それらの安吾自身による述懐と、批評家による安吾への評価をふまえて、今回の調査で確認できた一九五〇年以降のカタカナ表記の増加が美文から離れて自己を表現する手段として選択された表記方法だったと推定する。

（もりおか ゆかな）